
そこの天使

至高な思考の持ち主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そこの天使

【Zコード】

Z0415E

【作者名】

至高な思考の持ち主

【あらすじ】

今日は日曜日。天気はもの凄く晴れた日だ。そんな日に押入れを開けたら真っ白なワンピースを着た自分は天使だと言う少女が現れた。しかも居候するなんて抜かしやがる。これから俺の日常はどうなっちゃうんだ！？『日常系ドタバタコミカルストーリー』

プロローグ

「おー、セーの天使

目の前に浮かんでいる、可愛らしく少女に向けて言つ。

「はあー、なんですか？」

「じりじりと微笑むと、少し心が揺さぶられになつたがそんなじりじりで
めげる俺じゃない。

「居候なんて絶対に俺は認めないからなー！」

それはさかのほり……とこうよつて10分ほど前
……。

「ふわあーねみー……」

外から聞こえる馬鹿うるさいズズメたちのせいで眼が覚めてしま
つた俺は、だるい体を起こして洗面台へと向かわせた。蛇口から出
る冷水で寝ぼけた顔をシャキッとさせた。

今日は日曜日だ。本当なら一 日中寝ていい所だが、起きてしま
ったものはしようがない。どこか散歩にでも行くとするかな。外
を見ると、お日様がキラキラと辺りを照らしていた。うん、これは

行くしかないだろう。

そうと決まれば話は早い。モモクシャになつてゐる布団を綺麗に畳み、押入れを開ける。

「……あの、こんなにちわ

……ホワイ？？

スウー…バタンっ

「さて、今日は押入れにしまわないので外に干そつか。こんなに天気が良いんだからなあ」

「あの、無視しないでください」

閉めたはずの押入れがまた開く。うん、これは気のせいだ。

「あの～…聞いてます？」

いや、聞いていない。むしろ聞こえない。そこは誰も入っているはずがないんだからな。そこから声がするなんてありえん。ちらつと見てみるとその声の主。真っ白なワンピースを着た中学生くらいの少女は俺の真後ろに立つて俺の顔を見上げていた。少し驚いたが、上目づかいのその少女は軽く釣りあがつた猫目な所が印象的だった。

「……キリ……誰？」

そう聞くと、少女はこいつと微笑み自己紹介を始めた。

「私の名前はユーラ。今日からあなたの家に居候させてもらう天使です」

言い終えてから、もう一度にこりと微笑む。

「そうか、天使かあ……はうあつ！？」

プロローグ（後書き）

なんとなく書いてみました。
『天使』というキャラクター何故にか使ったかつたというのが、発端
です。

天使「ユーハ」

「はー、天使です」

何かおかしいのですか?といった表情でこちらを見上げるよつこして見てくる。いやいや可笑しい、といつか問題ありますぎだ。一言で言つと謎だ。しかも……

「居候つてどうしてハーハーとだ?」

「やつそのままの意味ですよ」

そのままの意味ですよ。なんてことはわかつてゐ。やつじやなくてどうじてそつたのか経緯を話せつていつ。……といつか天使つてなんだ!? もつ、色々とつゝこみ所満載だぞコノヤロー。色々と悩んでこる俺を覗き込むよつこして声をかける。

「あの~……」

「なんだつー?」

「ひやつー?」

ついつい大きな声で怒鳴つてしまつと、押入れへと隠れてしまつた。顔だけ出して、涙声で話す。

「……すすみません。……ぐす……いきなり現れちゃつて……」

「うやうや、俺の事を怖がつていいひつこ。……やれやれ、いひこ

うタイプは苦手なんだよな。ひとつと近づいて手を差し出す。

「わりい、驚かせたか」

少女はビクビクしながらもジロジロと危険ではないか、確認している。確かに近所にいた猫も最初はこんな感じで警戒してたわけな。そんなことを思い出していると、ゆっくりと押入れから出てきた。どうやら俺は危険じゃないと判断したらしい。

「まあ、座れよ」

一枚しかない座布団を放り投げるようにして少女の足下に敷く。

「あつあつがとひ、」ヤニます」

おどおどしながらも姿勢正しく正座で座る少女を見て、実家の妹を思い出す。顔立ちからしてちょうど同じぐらいの年頃だらう。じーっと見ていたのが恥ずかしかつたのか頬をほんのりと赤く染めていた。

「あーうん、でだ。詳しく述べてもういいのか？」

改めて聞くと、何を?と頭にクエスチョンマークが浮かんでいるのがわかつた。

「まず、天使ってのはどういうことだ？」

ジリからビリうみてもやけりの中学校に通う女子中学生くらいにしか見えない。ただ可笑しいと思つといふとこえは、髪の色くらいにもんだ。

腰に届きそうなくらい長いストレートの髪は、輝いているんじゃないかと思えるくらいの銀色だった。……ただ、これくらいで天使だと認めるのはお門違いだらう。髪の色くらい、今時何色がいても可笑しくないだらう。

まあ、ここまで綺麗に銀色のはちょっと異質だらうが……ありえない話しじやない。

「えーっと……私は天使なんです」

当たり前と言った表情でそう答える。いや、俺が聞きたいのはそういうこう事じやなくてな……。

少女もどう説明して良いのかわからぬ様子だったが、数秒考えてから何やら閃いたようで、いきなり立ち上がった。

「おい、何をするつもり……つてー？」

田の前で優雅に浮かぶ少女が、どうですか?といわんばかりにこちらをみて微笑んでみせる。真っ白なワンピースをひらひらとなびかせながら宙に浮かぶその様は天使と言われても納得せざるを得なかつた。

いつのまにか背中にはこれまた真っ白な翼が生えていた。どうやら、浮遊する時以外は現れないらしい。ゆっくりと地面に降りるとその翼は音もなく消えてしまった。少女は座りなおしてからじーっと俺に訴えかけてくる。

「わかった。信じたくないが信じよう。お前は天使だ

天使だろうが悪魔だろうが関係ない。俺が生きてきた中で宙に浮かぶことのできた人間はいないんだからな。信じる他ないだらう。一応、右の頬をつねってみる。うん、かなり痛い。これは夢じや

ない。

そんな様子が可笑しかったのかクスクスと笑い声を洩らす。

「笑うんじゃねえよ！」

「はっはーー！」

びくっと、また肩を強張らせる。おっと、また怖がらせちまつたか
……全くもつて面倒臭い奴だ。

「それで、だ。お前は天使だということは一万歩譲つてわかった。
だけど居候つてのはどういう意味なんだ？」

「えーーと……居候をせてもうつつていう意味ですー。」

……本当に面倒臭い奴だ。

天使「ユーラ」（後書き）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0415e/>

そこの天使

2010年10月19日20時19分発行